

波と風

理念

思いやりのある
やさしい誠実な医療を
提供します

基本方針

1. わかりやすい説明による安心・安全な医療を提供します
2. 最新の知識と技術による質の高い医療を提供します
3. 地域医療機関との連携を強化し、地域社会の発展に貢献します
4. 高度な専門性をもつ医療人の育成に努めます
5. 医療資源を適正に活用し、健全な経営を実践します

CONTENTS

- 2~9P 新年挨拶
- 10~11P 診療科紹介(外科)
- 12P 職場紹介(3A病棟)
- 13P 職場紹介(経営企画室)
- 14~17P 第77回国立病院総合医学会の開催報告
- 18~19P 第77回国立病院総合医学会
ベスト口演賞、ベストポスター賞
- 20~21P 呉市総合防災訓練、
中国地区DMAT連絡協議会実働訓練に出動!
- 22P うちの部署の接遇キラリさん
- 23P 連携医療機関紹介
- 24P 我が家のスターたち
- 24P 寄付について、編集後記



新年にあたって

院長 下瀬 省二

明けましておめでとうございます。昨年に続いて干支（えと）の話をしていただきます。

ことしの干支は辰（たつ）です。干支はもともと、古代中国の思想である陰陽五行説から発生したもので、十干（じっかん）と十二支（じゅうにし）の組み合わせになっています。十干は、陰陽五行説に基づいて「木・火・土・金・水」の五行と、「陰・陽」に分けたものです（表1）。陽の語尾の「え」は兄、陰の語尾の「と」は弟が語源となっています。

十二支は、古代中国で、天球を約12年で1周する木星の運行を目安として、12の方角に分けて名前を付けたものと言われています。十二支にも陰・陽があり、「子・寅・辰・午・申・戌」が陽、「丑・卯・巳・未・酉・亥」は陰で、交互に割り当てられています（表2）。

表1. 十干

行	陽	陰
木（き）	甲（きのえ）	乙（きのと）
火（ひ）	丙（ひのえ）	丁（ひのと）
土（つち）	戊（つちのえ）	己（つちのと）
金（かね）	庚（かのえ）	辛（かのと）
水（みず）	壬（みずのえ）	癸（みずのと）

表2. 十二支

陽	陰
子（ね）	丑（うし）
寅（とら）	卯（う）
辰（たつ）	巳（み）
午（うま）	未（ひつじ）
申（さる）	酉（とり）
戌（いぬ）	亥（い）

十干十二支は、陽と陽、陰と陰の組み合わせで作られています。十干の5つの陽（甲、丙、戊、庚、壬）と干支の6つの陽（子、寅、辰、午、申、戌）の組み合わせで5×6=30通り、十干の5つの陰（乙、丁、己、辛、癸）と干支の6つの陰（丑、卯、巳、未、酉、亥）の組み合わせで5×6=30通りで、両者を合わせると60通りです。十干十二支が一巡するのに60年かかり、一巡すると還暦になります。2022年が陽と陽で「壬寅（みずのえとら）」、2023年が陰と陰で「癸卯（みずのと）」、2024年が陽と陽で「甲辰（きのえたつ）」のように組み合わせられます。尚、甲辰（きのえたつ）は、十干十二支の41番目にあたります。

「甲（きのえ）」は十干の1番目、生命の循環で最初に位置し、生命が誕生した状態を表しています。陰陽五行思想では「木の兄」と表し、「木の陽」を意味します。五行の「木」は生長、柔和、曲直、春の象徴で、「陽」は積極的や大きいといった意味です。つまり「甲」は、急成長、寛大、屈曲、発展といったことを表しています。「辰」は十二支の5番目で、草木の成長が一段落し、整った状態を表しています。すべての新芽が葉を広げ、降り注ぐ日の光を全身で浴びている中春のイメージで、急激に成長することを表しています。「甲」と「辰」は、「木の陽」が重なる「比和」と呼ばれる組み合わせで、同じ気が重なると、その気は最も盛んになります。その結果が良い場合にはますます良く、悪い場合にはますます悪くなるということになります。陰

陽五行思想で読み解くと、「春の日差しが、あまねく成長を助く」となります。成長を助ける春の日差しは、表に出ているものばかりではなく、日ごろ隠されていたものにまで寛大に広く注がれ、成長や変化を促すことを表しています（LIFELL HOME'S PRESS 村上瑞祥2023年12月2日「2024年の干支「甲辰」はどんな年？」より引用）。

新年という新たな転機に決意や目標として、新年の抱負を立てる人も多いと思います。目標に向かって完璧を求めるのではなく、定期的に時間を割き習慣化することが大事なようです。アメリカの作家ユードラ・ウェルティは次のように述べています。新年の抱負や計画、目標を守るのは難しい。意気揚々と始めたものの、勢いがなくなり、数日で断念してしまうことがよくある。これは、健康の目標、執筆作業、仕事のプロジェクトなどにも当てはまる。この傾向は人間の本性に起因している。私たちは、物事が期待通りに進まないと辞めてしまう傾向があり、長期的な日課には退屈をおぼえる。しかし、習慣を作ることが成功の鍵になることもある。長期的なプロジェクトを完了させる最善の方法は、それを定期的な活動に変えることだ。これは、運動や執筆活動、その他どんな努力にも当てはまる。毎日同じことをするのは、最初は単調に思えるかもしれないが、やがて生産的なリズムになる。習慣化することについてもう少し深掘りすると、私たちはしばしば物事を後回しにしている。完璧なタイミングを待ったり、アイデアが枯渇してしまうのではないかと不安に思ったりする。しかし、毎日少しずつでもプロジェクトを始めてしまえば、「待ち」の状態から実行に変わる。そうすれば、たとえ怖くても前に進み続けることができる。

Quartzの記事では次のように述べられています。

私たちは普段、自分がどれだけのアイデアを思いつくことができるのか気づいていない。何かをやりたくなるまで待っていたら、物事を成し遂げるチャンスを何度も逃してしまうことになるだろう。本質的な戦略は、「始める」ことだ。プロジェクトに定期的に時間を割き（習慣化）、困難に強くなることで、目標を達成できる可能性が格段に高くなる。（1日5分ビジネス英語2023年11月29日「同じリズム」より引用）

これらから言えることは、「毎日少しずつでも物事を始めてしまえば、待ちの状態から実行に変わり、前に進み続けることができる。注意しないといけないのは、完璧なタイミングや何かをやりたくなるまで待っていたら、物事を成し遂げるチャンスを失う。」ということです。私の新年の抱負は、「何かを思いついたら、とにかく始める。その日に切りよく終わらせることを目標とするのではなく、できるだけ毎日、少しずつでも行って習慣化する。」にしたいと思います。本年もどうぞよろしくお願い致します。





新年のご挨拶

副院長 田代 裕尊

新年明けましておめでとうございます。皆様には良い年を迎えられましたでしょうか。

やっと昨年5月からコロナ感染症が5類感染症に移行し行動制限が緩和されました。皆様には旅行に行かれたり、飲み会に参加されたりと、コロナ禍以前の日常を取り戻しつつあるのではと思います。学会も現地参加となり参加人数も多くなりディスカッションも活発に行われ、また旧友と顔を合わせて近況を語り、さらに夜の飲み会など学会の醍醐味を肌で感じることができるようになりました。

さて、以前から云われていましたが、最近“〇〇不足”という言葉がテレビ、ラジオ、インターネット、新聞等で見たり聞いたりする機会が多くなりました。少子化に伴う人口減少と今年から始まる働き方改革が拍車を駆け、トラック・バス・タクシー等の運転手の不足、またIT人材不足など様々な業種で人不足が叫ばれています。また我々医療福祉の業界では、薬に始まり、医師、看護師、介護士不足等と多彩です。医師数を見てみますと、日本全体の医師数は増加していますが、広島県の中山間地域では医師不足となっています。また診療科別では増加している診療科がある一方少数の診療科では現状維持か減少傾向にあります。婦人科、小児科はかなり以前から減少傾向にあり、医療界において対策が練られインセンティブ等付加され女性の入局も増加し医師数の減少には歯止めが掛かりやや持ち直しているように見えます（認識が甘いかもしれませんが）。一方私の専門領域である外科では、10年以上前より減少傾向にあり、診療科の中で最も減少率が高く絶滅危惧種であると学会内では危機感を強めています。広島大学においても、私の研修医の頃（約35年以上も前）では外科全体で毎年20人近くが外科に入局し、母科（旧第二外科）でも多い年は10名以上の入局がありました。しかしながら近年減少傾向にあり、臨床研修医制度さらに専門医制度がスタートしてからさらにその減少傾向に拍車がかかり、入局は多くて5名程度で2～3名の時もあります。特に外科の中でも消化器外科医をめざす研修医・医学生はかなり少なくなり（日本消化器外科学会だけが、20年前に比べ会員数が10%

（2000人）以上減少）、広島大学旧第一外科と第二外科合わせて今年は3名と聞いています。この要因として消化器外科では“きつい”、“しんどい”、また一人前になるのに時間が掛かる、上下関係が厳しいなどが要因として挙げられます。研修医、医学生には外科の明るい未来を展望できないのかもしれませんが。そのため、ローテーター（研修医）には外科の魅力や遣り甲斐を伝え、レジデントには早めに手術を執刀し、手術の達成感をなるべく多く経験出来るように努めています。また外科学会としても働き方改革を進め、若い外科医の負担軽減にチーム医療やタスクシフトなど試みられていますが、その効果はさほど見られていません（何らかのインセンティブが必要かも）。また他の診療科の入局の状況は事細かには聞いていませんが最近では消化器内科医の入局も少ないと聞いています。以前では最も入局していた診療科と認識していたのですが、やはり夜間の呼び出しなど急患が多く緊急のカメラ検査など“きつい”職種に分類されるかと思えます。これらの現象が一時的なもので、杞憂に終わればよいのですが、現状を見ると厳しいものがあります。このままの現状が続くと5～10年後には年配の消化器内科医・外科医が第一線から退き消化器内科・外科医が不足し消化器がん難民が現れてくるのではと危惧されます。広島における消化器がん診療が大変心配になります（少し大袈裟ですが）。その対策を国や県また医療界全体で考えていかないといけない問題と考えます。2024年が始まったばかりで暗い話題となりましたが、少しでも多くの方に現状を認識していただければと思いを執りました。

少し話題は変わりますが、“六十の手習い”ではないのですが、最近プログラミングを勉強し始めました。年を取ると記憶力が衰え昨日やったことをまた今日もし直しておりなかなか進みません。来年まで継続できているかわかりませんが、継続できておればその経過を来年報告したいと思えます。今年は最も重要である若手外科医の育成と“継続は力なり”の実践を目標に今年も頑張りたいと思いますので本年も何卒よろしくお願い申し上げます。



新年を迎えて

副院長 繁田 正信

新年明けましておめでとうございます。

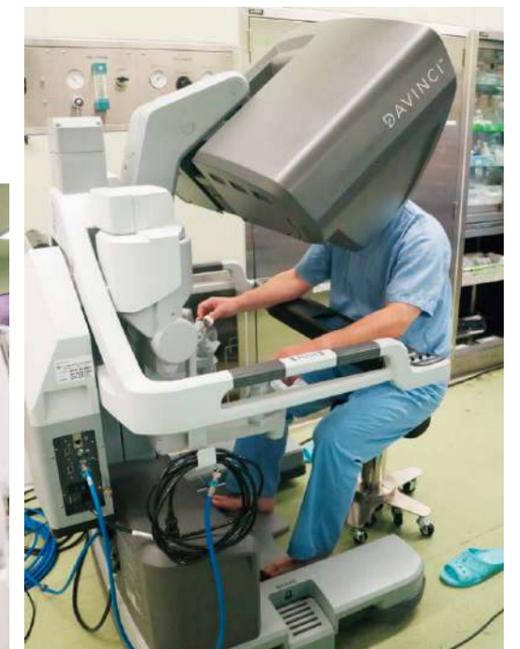
昨年は新型コロナウイルスも2類から5類に移行し、徐々に日常生活を取り戻して来ています。街中も多くの人で賑わい、活気を取り戻していますし、特に目に付くのは、病院内は今でもマスク着用が必要ですが、一步外に出るとマスクなしの方がほとんどです。2019年に中国の武漢から端を発し、全世界に瞬く間に広がった新型コロナウイルスは、無くなってはいないものの、共存と言う形で終息しつつあるのが現状です。

新型コロナウイルス以外に目を向けると、昨年は円安、ガソリンの高騰、物価高、イスラエルのガザ地区への侵攻など暗い話題も多かった様に思いますが、その一方でG7サミットが広島で開催され、全世界に広島の名前を再認識して頂けました。今でも多くの外国人観光客が広島を訪れています。

さて当院の出来事としては、昨年11月3日に手術支援ロボット ダヴィンチXiが搬入され、12月から始動致しました。外科手術は従来、術者の手を腹部に挿入して行う、開腹術を基本としておりました。それが、1990年代後半から腹腔鏡手術に徐々に置き換わるようになりました。腹腔鏡手術は、腹部に数カ所を開けて、お腹の



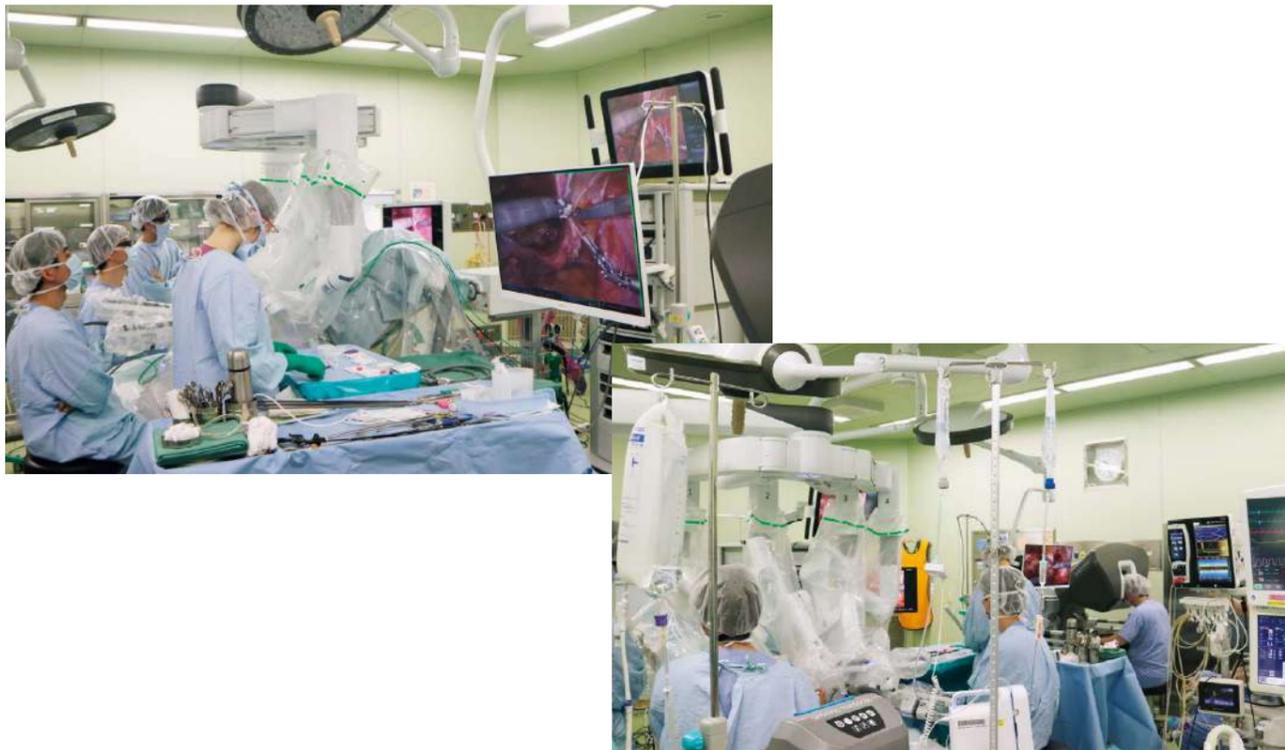
中を二酸化炭素で膨らませて空間を確保し、内視鏡を挿入して、内視鏡でお腹の中を見ながら、別の穴から特殊な手術器具を挿入して手術を行うもので、お腹を大きく切開しないため、患者さんにとっては術後の疼痛が軽く、回復も早い、また、お腹の圧を二酸化炭素で高くするため、出血量が少なく済む、などの利点があるものの、導入当初は手が使えないため、非常に難しく、時間もかかっておりました。そのため、多くの外科系医師達は、





腹腔鏡手術は一部の特殊な人がする術式で、基本は開腹術、と考えておりました。しかし、医療機器の発展は凄まじく、腹腔鏡用の手術器具が次々と開発され、2000年から2015年頃までには従来の開腹術は著明に減少し、腹腔鏡手術全盛期となりました。ところが医療技術の進歩はこれに留まらず、さらに手術支援ロボットが開発されました。腹腔鏡手術は患者さんに優しい、優れた術式なのですが、お腹の中で縫合する技術はかなり高度なもので、腹腔鏡下前立腺全摘除術や腹腔鏡下腎部分切除術の様な術中に臓器を縫合する術式に関しては、熟練した

医師でないと困難で、習熟に長い年数が必要でした。ところが手術支援ロボットは、この熟練した外科医の技を、より容易に行えるように出来る機器です。もちろん、手術支援ロボットさえあれば、良い手術が出来る、と言う訳ではありませんが、上達が早くなることは間違い無いと思われま。今後は、今まで培った開腹術や腹腔鏡手術の熟練の技をロボット支援手術に活かして、より多くの呉市民及び呉市周辺の方々の健康を支えたいと考えております。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。



新年のご挨拶

統括診療部長 大庭 信二

新年明けましておめでとうございます。今年は辰年です。龍は十二支の中で唯一の神話上の生き物で、力強さ・幸運の象徴です。そして、Covid-19 感染症流行も今年で5年目を迎えます。コロナ感染症が収束に向かい、幸運に恵まれ、穏やかな季節性感染症に変貌することを今はただただ祈るばかりです。

一方、コロナ感染症流行のお陰で、web 会議、web 参加、online 授業などが急速に発達し、人々が実際に現地に行かなくても、必要な情報を共有することができるようになり、社会活動がずいぶんと便利になりました。そして今後急速に普及してくると考えられるのが、ChatGPT などの OpenAI です。試しに年始の挨拶を400字以内と指定し、GPT-4 に書くよう指示したところ以下のような文章が3秒で出てきました。

『新年あけましておめでとうございます。昨年は、新型コロナウイルスの感染拡大により、医療現場に多大な負担と苦勞がかかりました。しかし、皆様の献身的な努力



新年明けましておめでとうございます

臨床研究部長 讃岐 美智義

新年明けましておめでとうございます。2024年の幕開けに際し、呉医療センター臨床研究部長として、皆様からのご挨拶を申し上げます。本年も引き続き、皆様の変わらぬご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症の法的位置づけが大きく変化しました。5月8日には、「2類相当」から季節性インフルエンザと同じ「5類」へと引き下げられ、それに伴い社会経済活動に大幅な緩和が実施されました。この変化は、私たちの日常生活における多くの制限の緩和をもたらし、社会活動全体が活発になりました。特に、学術分野では、コロナウイルス以前の状態に近づき、学会の開催も再び可能になりました。昨年までの2年間、私たちは主にウェブ上での学会活動に限られていましたが、昨年は神戸、奈良、宮崎、東京など多くの地域での学会に参加し、奥深い内容の議論をかわすことができました。

昨年10月、広島で開催された第77回国立病院総合医学会では、当院の院長が会長を務め、全国の国立病院からの参加者との熱気溢れるディスカッションが展開されまし

と協力により、多くの患者様の命と健康を守ることができました。本当にありがとうございました。

私は、この病院のスタッフの皆様から敬意と感謝の気持ちを表します。また、ご家族やご友人の皆様にも、ご理解とご支援をいただくことに深く感謝いたします。今年は、ワクチンの普及や治療法の開発により、コロナ禍が収束に向かうことを願っています。しかし、まだまだ油断はできません。感染予防や感染対策に引き続き努めていきましょう。そして、自分自身の健康と安全にも十分気をつけてください。

私は、皆様の幸せと成功を心から祈っています。今年も、この病院のスタッフとして、一丸となって頑張っていきましょう。どうぞよろしくお願いいたします。』

どうでしょうか？ GPT-4、恐るべしです。氣遣いに溢れた、とても優しい文章です。もとなるデータの90%以上が英語なので箇条書きっぽくなるようです。今後この OpenAI がどのように医療現場に関わってくるのかとても楽しみです。

とは言え、実際に医療行為を行うのは我々人間です。もう一度言わせてください。今年もどうか宜しくお願いいたします。

た。これらの学会では、学術的な話題だけでなく、近況報告や私たちの日常生活に関する話題で盛り上がり、旧知の友人たちとの濃密な時間を過ごすことができました。これらの経験は、科学的な知識の交換だけでなく、人間関係の再構築にも大いに貢献しました。

臨床研究分野においても、昨年度は安定した成果を上げることができました。国立病院機構による臨床研究活動の評価システムでは、各センターや病院の研究実績が点数化され、これが直接、人員配置や助成金の配分に影響を与えます。一昨年から、外部資金の獲得がより重視されるようになり、治験や競争的資金獲得のウエイトが高まりました。一方で、論文のウエイトは減少し、当院の活動実績ポイントの低下が懸念されましたが、職員の皆様の献身的な学術活動のおかげで、英語論文、和文論文、学会発表のポイントを増やし、学術活動分野では全国10位、全体でも13位の成績を収めることができました。

今年も、当院での研究がさらに進展するよう、環境整備に努め、着実な研究活動を重ねていきたいと考えております。また、新薬の開発に関する治験では、患者様への貢献を目指し、引き続き皆様のご協力をお願いします。新しい年も、皆様のご指導と支援を賜りつつ、一層の努力を重ねてまいります。これまでのご支援に感謝を申し上げるとともに、新年が皆様にとって健康で充実したものとなることを心よりお祈り申し上げます。



新年のご挨拶

看護部長 神田 弘子

新年あけましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症がインフルエンザ相当となり、世間は、徐々に以前の生活に戻ってきました。また、後半は、異常気象のため、11月上旬まで気温が高く、扇風機を片付けることが出来ない状況でした。その温い中で、秋祭りが通常に再開され、多くの人が、外に出歩く姿が見られました。しかし、外でも密集する場所では、個人の判断でマスクを付けられる方が多くいました。病院の中では、マスク使用が当たり前となっています。このような状況がいつまで続くのでしょうか。

さて、呉医療センターでは、看護の質向上の一貫で、専門看護師・認定看護師（一定の教育を受け日本看護協会の試験に合格）の育成以外に、特定行為実施可能である看護師の育成を行っています。当院では、令和3年度に厚生労働大臣から救急パッケージの特定行為研修病院に指定されています。研修の目的は、医師の包括的な指示のもと、診療の補助（特定行為）が安全かつ医療倫理に基づき実施できる基礎的能力を養うことです。現在、当院では3期生が受講中です。近隣の施設からの受講もあり、修了後は各施設で技術を発揮していることと思います。救急パッケージには、どのような技術があるかと申しますと

「気管チューブの位置の調整」「人工呼吸器の設定の変更」他、「直接動脈を穿刺し採血をする」「橈骨動脈ラインの確保」「脱水症状に対する輸液の補正」「抗けいれん剤の臨時投与」などです。これらの技術ができるように講義を受け各試験に合格し、2名の医師による実技審査が行われます。国立病院機構では、これら特定行為研修修了者が各勤務に1人は配置できることを目標にしています。これらの者を配置することにより技術のみならず、フィジカルアセスメントが出来る看護師、つまり早めに患者の異常を把握し安全に医師へと繋ぐためです。また、患者さんの訴えから何が考えられるか病態だけでなく倫理的側面へも目を向けられる看護師を育成するためです。現在、当院では、救急パッケージ修了者が1名、感染管理に関する特定行為研修修了者が1名、創傷管理・ドレーン管理研修修了者が1名在籍しています。また、全ての特定行為が実施できる看護師を診療看護師と言います。この者は、2年間の教育を受け修了した者に与えられます。当院では、現在2名の診療看護師が在籍していますが、今年の3月に1名修了する予定のため、4月からは、3名の診療看護師が、現場で活躍します。看護師は、診療の補助、療養上のお世話が法律で決められています。その範疇で、根拠をもって、実践し、意欲的に働く姿勢は、後輩看護師が目指す理想像となるはずで、呉医療センターの看護師の資質の向上を目指し、今年、滝を登る龍のように何事にも前向きに取り組んで参ります。



ムパフォーマンスが高い」と表現されています。

タイパとは「時間対効果」ということになるようです。でも何を見たか覚えているの？、本当に理解して楽しんだの？、と疑問もありますが、膨大なネット上からの情報収集をこなしてきた世代はより効率的に短時間で求める情報にたどり着き、最大の効果を得ることを意識しているようです。

また、タイパを意識することは、つまり、物事を効率的に行えているということではないでしょうか。仕事や日常生活においても「どう改善すれば時間を短縮できるのか」と常に考えることで、無駄な手間を省き、より効率的に物事をできるようになります。自分の創意工夫でより良い方を実践するということは、改善のためのプロセスを見つけて出そうとしているとも言えるのではないのでしょうか。

われわれの医療分野も人材不足や医師の働き方改革などで業務の効率化が迫られています。医療DXが必要であると様々な場面で言われていますが、我々の世代には「コスパ」とか「タイパ」はなんだかしっくりきませんね。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。



新年のご挨拶

薬剤部長 藤田 秀樹

新年、あけましておめでとうございます。年度末をもちまして定年退職となりますので、ご挨拶させていただきます。

人口減少とともに、医療機関における人手不足の問題が大きな課題となっています。そしていよいよ医師の働き方改革への対応も2024年4月から実施されるため、タスクシフトを含む様々な取り組みが行われています。

働き方改革は医師だけでなくすべての医療従事者にとって重要な問題です。薬剤部では機械化の推進や薬剤師以外の者へのタスクシフトを勧めていますが、これだけでは不十分ではないかと考えています。薬剤師の欠員が常態化している現状では、やりたいことや求められていることに対して十分に取り組むことができないのが現



新年のご挨拶

副学校長 橋本 一枝

新年おめでとうございます。2024年がスタートいたしました。

今年の干支は甲辰（きのえたつ）です。年女（年男）には「その年の年神様のご加護をほかの干支の人よりも多く受けられる」という縁起が良いとされる説があるといわれています。ここで干支のことを記載させていただいたのは、私が甲辰の年女に該当するからです。

昨年の波と風 vol.12 で下瀬院長が、陰陽五行説に基づく十干（じっかん）と十二支（じゅうにし）について記されていたのを思い出し、自身も少し調べてみました。この2つの組み合わせで、今年『甲辰（きのえたつ）』にあたります。『甲』が持つ意味は、「第1位であり、優勢であることを表す他、まっすぐに堂々とそそり立つ大木」を表しています。『辰』は、十二支の中では唯一の架空の生き物で、水や海の神として祀られてきた辰（龍）

実です。業務の見直しを行い、時には切り捨てる勇気をもって、働きやすくなりがいのある職場環境を作り出していかねばならないと感じています。

そんなこんなで、あっという間に定年を迎えることになりました。おかげ様で、大過なく今日まで勤め上げることができ、いままで支えてくださった方々に感謝申し上げます。

「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」これからのNHOは、次世代のあなた方にお任せします。医療人に求められる業務は時代とともに変化しています。変化に対応するために、新しい技術の活用や生産性の向上について常に考えなければなりません。今後の医療情勢がどのように変化していくかは誰も予想ができませんが、さらなる発展と、ご活躍をお祈りしております。長い間、本当にありがとうございました。

には、竜巻や雷などの自然現象を起こす大自然の躍動を象徴し、「龍が現れるとめでたいことが起こる」と伝えられています。この2つの組み合わせである『甲辰』は、「成功という芽が成長していき、姿を整えていく」を表しているそうです。

『甲辰』のもつ意味の大きさに圧倒されそうですが、年女の良い縁起にあやかりつつ、学校運営の喫緊の課題である「学生数の確保」と「在校生への学習支援」に向けて、学校職員の協力を得ながら、一致団結し、業務にあたりたいと思います。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。



外科

外科科長 清水 洋祐



スタッフ：田代裕尊、清水洋祐、首藤毅、尾上隆司、鈴木崇久、田澤宏文、嶋田徳光、谷峰直樹、佐田春樹、田妻昌、柴田祥之、藤井友優、小野倫枝、福田崇博、宮田柁秀(写真1)

呉医療センター・中国がんセンターの外科は15名の医師が在籍する病院で最も大きな診療科で、一般外科、消化器外科、移植外科を担当しています。当院は中国がんセンターであり、消化器系の悪性腫瘍に重点を置いた診療を行っています。食道がん、胃がん、大腸がん、肝臓がん、膵臓がん、胆道がんなどの消化器がんの手術および抗がん剤などによる化学療法を行う一方、胆石症や胆嚢炎、腸閉塞や虫垂炎、消化管穿孔、鼠径ヘルニアなど、緊急手術を含めて広く一般外科診療も行っていきます。加えて2018年より腎移植外科も導入しました。

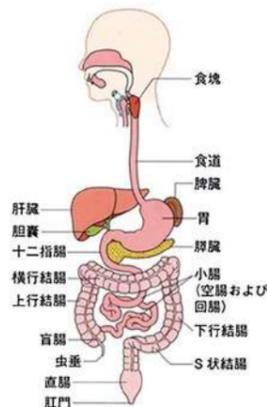
消化器がん治療は、上部消化管（食道・胃）、下部消化管（大腸）、肝臓、膵胆道の臓器別グループで、消化管から肝胆膵と幅広く専門性の高い低侵襲手術を行っています。

上部消化管領域（担当：鈴木、田澤）

食道がんに対する治療は、手術、化学療法、放射線療法を組み合わせた集学的治療が行われます。食道手術は、胸部・腹部・頸部に渡る広範囲の手術です。以前は肋間を大きく開く開胸操作が行われており、侵襲が大きく術後縫合不全や肺合併症の発症率

が高い手術でしたが、近年低侵襲治療（腹臥位胸腔鏡下手術）の導入により、手術侵襲は軽減し術後疼痛や合併症も減少しています。そのため80歳以上の高齢者の手術例も増加傾向にあり、手術症例は令和4年度では15例でした。

胃がんの治療も手術を中心とした集学的治療が基本です。昨年度は58例（53例は腹腔鏡下手術）の胃がんに対する胃切除手術を行っています。内視鏡的治療で完治できない早期胃がんには腹腔鏡下胃切除が行われます。進行胃がんの治療も腹腔鏡下手術（症例により開腹手術）が基本ですが、術前術後の周術期化学療法を行うことによりその治療成績は向上しています。また肝転移などの遠隔転移や切除不能進行胃がんなどに対しても、化学療法の進歩により手術療法が可能となり長期生存が得られるようになっていきます。



下部消化管領域（担当：清水、嶋田、佐田）

下部消化管領域では、炎症性腸疾患を含めた良性疾患から大腸がんに対して専門的な医療を行っています。昨年度の手術症例では、大腸・直腸がんに対して131例の手術を行い、その内123例は腹腔鏡下手術でした。治療の基本は外科的切除ですが、進行直腸がんでは化学放射線療法を併用した集学的治療を行っています。また、手術だけでは完全に切除することが難しい局所進行がんに対しては周術期化学療法を行った後に手術を計画しています。同様に、肝臓などに遠隔転移を伴う進行した切除不能大腸がんに対しても化学療法により切除可能となる場合があり、生命予後の改善が期待できます。がん組織の遺伝子解析で最適な化学療法を選択する「がん個別化医療」は、特に大腸がんが進んでいます。

肝胆膵領域（担当：田代、首藤、尾上、田妻）

当院は3名の肝胆膵外科高度技能医、指導医が所属する呉地区唯一の肝胆膵外科学会修練施設です。

肝臓がんの治療は様々で、内科（局所療法）・外科（肝切除）・放射線科（動脈塞栓）の連携が重要です。当院においても機能的な連携のもと手術適応を決定しています。肝切除では、術前のシミュレーション（CTによる設計図作成）と肝予備能検査により安全で確実な手術を行っています。腹腔鏡下肝切除も積極的に行い、難易度の高い術式にも適応拡大し、術後の早期回復に貢献しています。肝切除術は転移性肝がんにも行われ、昨年度は肝切除症数も48例（28例は腹腔鏡下肝切除）と増加しています。

胆・膵がん領域でも、周術期化学療法の進歩が、術後成績の向上に大幅に寄与しています。術前切除不能または切除可能境界領域の進行胆・膵がんに対して術前化学療法を行い、切除可能となった患者さんに根治手術を行っています。新しい抗がん剤の効果で切除可能となる患者さんが増えています。近年、切除可能膵がんにおいても術前化学療法が基本となり、その成績も向上しています。また、膵切除においても積極的に腹腔鏡下手術を行い、術後QOLの向上に貢献してまいります。昨年度は、膵がん切除症例は、33例（腹腔鏡下手術は7例）でした。

腎移植外科（担当：田代、尾上、谷峰）

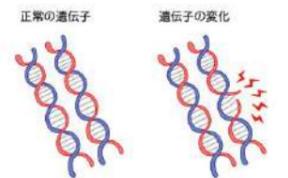
2018年より腎移植を開始し、本年まで17例の生体腎移植を行っています。いずれの患者さんも大きな合併症もなく退院されました。ドナー（腎臓提供者）の手術は、小さな傷で腎臓摘出を行い、早期に社会復帰されています。また、血液型不適合移植も抗体療法により拒絶反応もなく退院され社会復帰されています。腎移植の最大の利点はより長生きできるということです。今後もさらに末期腎不全の治療として、透析療法とともに行っていきたいと思っています。

Topic

*手術支援ロボット（da Vinci）が、令和6年1月より導入されます。外科領域では、胃、大腸の手術から開始予定です。より精度の高い手術が期待されます。



*「がん遺伝子パネル検査」を積極的に行っています。がんは、遺伝子の異常が原因であることや遺伝子異常には様々な種類がある



ことがわかってきました。これまでの臓器ごとではなく、がんの原因となる遺伝子異常ごとに薬剤を選択できる「がんゲノム医療」を推進しています。

おわりに

呉医療圏では、日本で高齢化が最も高く、日本の10年先を行っていると言われております。患者さんの背景を踏まえ、できる限り患者さんのニーズに沿ったQOLの向上につながる外科診療を提供するように努めたいと考えています。



3A病棟

看護師長 和井元 孝紀



経営企画室

経営企画室長 西岡 巧



救命救急センターは呉医療圏内の救急医療を担っており、24時間体制で入院や手術を伴わない1次救急、入院治療や手術が必要な重症患者に対応する2次救急、重篤患者や多発外傷等を受け入れる3次救急の患者の受け入れを行っています。

昨年度の救急外来受診患者数は、総数7,168名。救急車受け入れ台数はヘリ搬送を含む3,511名でした。緊急手術や心臓カテーテル処置等の治療に対応すると共に、救命救急センターには多発外傷、脳血管の疾患、循環器系の疾患、呼吸器系の疾患、感染症等の様々な重症・重篤な患者が入院されています。その他にも、一般病棟から術後の集中管理が必要となる患者の受け入れも行っています。

救命救急センター・救急外来で勤務するスタッフには、限られた時間と少ない情報のもと1分1秒を争う緊急性の高い救命処置対応、初療の介助を行いながら、危機的状況にある患者と家族への精神的ケアなど迅速な対応が求められます。そのため当病棟スタッフは救急看護に必要な知識や技術、リーダーシップ能力やコミュニケーション能力・調整能力を身に着けるために、日々研鑽を積んでいます。また、病棟には、急性・重症患者看護専門看護師をはじめ、感染管理認定看護師・新生児集中ケア認定看護師・集中ケア認定看護師の有資格者が在籍しており、専門的知識や技術が発揮できるように継続的な教育プログラムを立案し、後輩育成のための指導と実践を行っています。重症度が高いこともあり一般病棟と比較すると日勤勤務者が多いため、日々の看護実践を行いながら疾患と病態、さらに治療を結びつけて



考えることができるようにOJTでの指導に力を入れています。

当病棟のスタッフは救命救急センターと救急外来の他に心臓カテーテル検査室、透析室でも勤務を行っています。心臓血管カテーテル検査は24時間緊急対応ができるように循環器内科医師と連携しています。



透析室は3A病棟に併設されており、現在10床で運用しています。月曜日から土曜日まで毎日10名前後の患者を受け入れています。腎臓内科医師及び臨床工学士との連携を取りながら従事しています。



私達は、不安を抱えた患者さんやその家族に寄り添いながら、安全で安心できる看護を医師と協働し提供していきます。

経営企画室は事務部企画課に属する事務の一部門です。主な業務は、年度計画の策定とその達成状況の検証、院内ヒアリングの実施、病院運営のための基礎資料（患者数、診療点数等）や財務資料（経常収支、資金管理状況等）の作成、月次決算評価会及びDPC検証委員会等への資料提供により、院内全体に対して運営・経営状況の周知を行っています。

他の事務部門とは少し異なり、簡単に説明すれば、病院を運営していくために必要な経営の情報等を取り扱い、必要に応じて情報発信や関係部署との調整を行うことが主な業務になります。

また、将来の病院運営を見据えての企画提案等も行っており、場合によっては病院の方向性に大きく関わることもあるため、経理責任者である院長の指示を仰ぎながら慎重に業務を進めることに努めています。

毎年5月に実施している院内ヒアリングは各部門の年度目標を確認する場であり、また幹部職員との意見交換の場でもあり、当室はその場の繋ぎ役として必要な情報を提供することにより、各部門が病院目標に沿った病院運営に円滑に参加いただけるようにサポートを行っています。

現在は総勢5名がこれらの業務に従事しています。

集計して数字を出して資料を作成して終わりではなく、その原因や要因を分析するまでを経営企画室に求められています。数値が悪化していればその原因を探し出すことや、対応策を見出すための資料を作成することは時間を要するうえ難解なことも多々あります。そのような時には当室で検討するだけでなく、他の部門と連携してデータを抽出することもあり、場合によっては当該部署にヒアリングをして資料をまとめることもあります。

また、単に院内で使用する資料の作成にとどまらず、来院患者さんの目に触れるデジタルサイネージやホームページ、広報誌等での積極的なアピールについても提案を行っています。

当院の位置する呉医療圏では人口減少が顕著であり、患者数の確保もますます厳しくなることが予想されますが、地域に選ばれる病院として経営分析等を通じて、経営企画室より積極的な提言を行っていきたくと考えております。

各部門との連携を深めて具体的な方向性を導き出していくことで、安定的かつ効率的な病院運営に貢献できるよう日々努めてまいります。



第77回国立病院総合医学会の開催報告

院長 下瀬 省二



第77回国立病院総合医学会を2023年10月20日（金）、21日（土）の2日間、リーガロイヤルホテル広島、広島県立総合体育館、メルパルク広島で開催しました。会長施設を呉医療センター、副会長施設を広島西医療センターが担当し、中国四国グループ各施設のご支援のもと開催しました。

新型コロナウイルス感染症が流行り始めた頃、まだ情報がほとんどない中、国立病院機構の各施設は、いち早く患者の受入れを開始しました。また、わが国最初の新型コロナワクチン導入に中心的な役割を果たし、ワクチン接種の先陣を切りました。さらに、厚生労働省や自治体の要請に対し、多くの職員を派遣することで、日本の医療を支えました。また、全国的な病院ネットワークを活用し、急性期医療、救急医療、災害医療を着実に実施するとともに、重症心身障害、神経・筋疾患、筋ジストロフィー、結核、精神医療など、他の設置主体では必ずしも実施されない、セーフティーネット系の医療を担い、日本の医療を支えています。学会のテーマである、「未来へ向かって～日本の医療を支える国立病院機構～」は、本格的なポストコロナの時代に入ったこのタイミングに相応しいものとなりました。

開会式は、会長の開会宣言、楠岡英雄理事長の開会の辞、浅沼一成厚生労働省医政局長の挨拶（ビデオ）の後に、山根健嗣広島県副知事、松井一寛広島市長、玉木正治広島県医師会副会長、山本恭子広島県看護協会会長からご祝辞を頂戴しました。



開会式

オープニングリマークスでは、楠岡英雄理事長に国立病院機構の各分野での取り組みとして、新型コロナウイルス感染症への貢献、診療における多職種連携、地域医療、医療的ケア児、DMAT活動、臨床研究、教育研修、業務運営などについて、わかりやすく解説いただきました。



楠岡英雄理事長

特別講演では、広島大学の越智光夫学長に「膝を守る」、医薬品医療機器総合機構の藤原康弘理事長に「PMDA 最近の動向」、スポーツジャーナリストの二宮清純氏に「スポーツで幸せな国へ」と題して、ご講演いただきました。



越智光夫広島大学長



藤原康弘PMDA理事長



二宮清純氏

教育講演では、慶應義塾大学整形外科の中村雅也教授に「私たちが目指す近未来の医療・介護・ヘルスケアとは」、大阪大学感染制御学の忽那賢志教授に「次のパンデミックに備える COVID-19から得られた教訓とは」と題してご講演いただきました。



中村雅也慶應義塾大学教授



忽那賢志大阪大学教授

各協議会からの提案を踏まえ、シンポジウム（40題）、パネルディスカッション（5題）を実施しました。シンポジウム7「感染症・ウクライナ侵襲から見てくる国立病院機構に期待される公的役割」では、ウクライナのOlena Nesterenko先生にオンラインで参加いただきました。さらに、リーガロイヤルホテル3階ロビーでウクライナの写真を展示しました。



山田憲彦先生、Olena Nesterenko先生、吉田学先生

一般演題は、予想を上回る2115題のご応募をいただきました。講演を15会場で実施し、県立総合体育館ではポスター発表と企業展示を行いました。久しぶりに多くの参加者が一堂に会しました。



第3会場



第5会場



ポスター会場

4年ぶりに開催された全員交流会は、ゲストの島谷ひとみさんの歌や機構本部主催の楠岡理事長による新型コロナウイルス感染症対応、大臣表彰関連、優秀論文賞、QC活動奨励表彰などの表彰式で大いに盛り上がりました。最後まで多くの方に残っていただきました。



全員交流会



新型コロナウイルス感染症対応



大臣表彰関連



優秀論文賞



QC活動奨励表彰

約6000名の方にご参加いただき、いずれの会場でも活発な討議、意見交換が行われ、無事盛会のうちに終了することができました。本学会の運営にご尽力いただきました、呉医療センター、広島西医療センター、中国四国グループの皆さま、そして、ご参加いただき盛り上げていただきましたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。



実行委員会委員・スタッフ写真

第77回国立病院総合医学会 ベスト口演賞、ベストポスター賞

セッション	演題番号	演題名	氏名	所属機関名
口演 74	O2-74-1	SNS を通して市販薬の過量服薬に至った2例	柴沼 栄希	NHO 呉医療センター 小児科
ポスター 5	P1-5-6	虫垂転移をきたした小細胞肺癌の1例	長岡 真実	NHO 呉医療センター 臨床研修部
ポスター 34	P1-34-1	巨大柿胃石に対してコーラによる溶解と内視鏡的摘出で治療に成功した1例	佐藤 人美	NHO 呉医療センター 臨床研修部
ポスター 52	P1-52-7	学内演習におけるルーブリック評価表を用いた看護技術評価の実践報告	天野 志保	NHO 呉医療センター附属 呉看護学校
ポスター 67	P1-67-7	コロナ禍における高気圧酸素治療室の取り組みとその成果を振り返って	多賀谷正志	NHO 呉医療センター ME 管理室
ポスター 151	P2-151-5	自家末梢血幹細胞採取のタイミングを計るための血液検査項目は？	市川 峻介	NHO 呉医療センター ME 管理室

演題名：SNSを通して市販薬の過量服薬に至った2例 小児科 柴沼 栄希

先日の国病学会で若年者の過量服薬について発表し、ベスト口演賞を頂くことができました。
近年SNSの普及に伴って若年者の過量服薬の増加が問題となっており、今後は小児科医は全身の管理だけでなく、彼らの心に寄り添った対応が重要になってくると考えられます。彼らにどう寄り添うのか、そしてSNSの問題にどう対応していくのか、まだまだ課題の残る内容について、同じ国立病院機構の先生方と意見交換を行うことができ、非常に有意義な学会でした。

演題名：虫垂転移をきたした小細胞肺癌の1例 臨床研修部 長岡 真実

2023年10月20日、21日に広島市内で開催されました第77回国立病院総合医学会にて「虫垂転移をきたした小細胞肺癌の一例」という発表をさせていただき、ベストポスター賞をいただきました。ポスター発表はほぼ初めてであり、貴重な経験をさせていただくことができましたと思います。直接ご指導いただきました先生方をはじめ、学会開催に尽力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。今後も医師としてより一層研鑽を積んでいく所存です。

演題名：巨大柿胃石に対してコーラによる溶解と内視鏡的摘出で治療に成功した1例 臨床研修部 佐藤 人美

この度は第77回国立病院総合医学会においてこのような賞をいただき、大変光栄に思います。初めてのポスター発表でしたが、消化器内科の先生方のご指導に支えられ、発表することができました。また、お忙しい中ポスター発表に足を運んでくださった方々や第77回国立病院総合医学会の運営に携わってくださった全ての方にも感謝申し上げます。今後はこの経験を活かし、更なる成長を目指して努力していきたいと思っております。本当にありがとうございました。

演題名：学内演習におけるルーブリック評価表を用いた看護技術評価の実践報告 NHO 呉医療センター附属呉看護学校 天野 志保

今回、カテゴリー「学校教育」で、学生の自己評価と教員の他者評価を比較し考察した内容を発表し、ポスター賞を受賞することができ嬉しく思います。

その際、座長から「発表がおもしろい視点で、今後の教育方法の検討に期待する」というコメントを頂きました。ポスター発表では、学生の自己評価と教員の他者評価での視点毎に評価点の差を確認した内容をまとめました。その結果、6つの評価の視点のうち、学生、教員の評価点に差があるものと、差がないものがありました。看護師は、自己の看護実践能力を客観的に捉える力が必要となります。したがって、自分自身の看護実践能力を適正に評価するために、評価点に差があった「観察」「説明」「報告」の視点については、学生自身が技術を客観的に捉えることができるように教育方法を検討していく必要性がわかりました。今後も、よりよい教育方法を目指したいと思います。

最後になりましたが、今回の演習で、当院の事務職員の方々に模擬患者を引き受けていただきました。ご協力に感謝申し上げます。

演題名：コロナ禍における高気圧酸素治療室の取り組みとその成果を振り返って ME管理室 多賀谷正志

本会では、当院高気圧酸素治療室で日常的に行っている取り組みを発表し、その内容について素晴らしい評価をいただきました。この日常的な取り組みを支えてくださっている立川高気圧酸素治療室長、耳鼻咽喉科の先生方、口腔外科の先生方、耳鼻咽喉科外来スタッフの皆様、医事課スタッフの皆様、高気圧酸素治療室スタッフの皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

演題名：自家末梢血幹細胞採取のタイミングを計るための血液検査項目は？ ME管理室 市川 峻介

今回の第77回全国国立病院総合医学会で演題発表をさせていただき、ご指導賜りました多賀谷技士長をはじめME管理室の皆様、関係者の皆様にお礼を申し上げます。私が発表させていただいたのは「臨床工学」のポスターセッションで、年々、「臨床工学」の演題数も増え、今回は口演が2・ポスターが3セッションでした。私のセッションは8演題あり、その数ある演題の中から私の発表をベストポスター賞に選出していただけたことに対し驚きと嬉しさを感じております。これからも、ME管理室スタッフ全員で力を合わせ、患者様のために私たち臨床工学技士が取り組める課題を一つずつ検討し研鑽を積んで参りますので、今後ともよろしく願い申し上げます。

呉市総合防災訓練、中国地区DMAT 連絡協議会実働訓練に出動!

財務管理係長 永田 佳也



令和5年10月30日(月)、今年も広多賀谷多目的広場にて呉市総合防災訓練が開催されました。呉医療センターからは岩崎救命救急センター部長、木下循環器内科医師、竹田診療看護師、辻副看護師長、半田副臨床工学技士長、岡本薬剤師、私永田のDMAT隊員7名で参加しました。

昨年度はコロナの影響もあり規模を縮小した開催でしたが、今年度はコロナ禍前と同様の規模で、消防局・警察のほか、自衛隊・医療機関・建設企業、市民団体など多くの方が参加しました。



災害現場活動



災害指揮所

訓練は大規模地震が発生したことを想定して、訓練前半で消防局、消防団、自衛隊などが協力し被災者の救助が行われました。市民団体の方々も応急手当や要支援者の避難行動の誘導など普段できないことを訓練されていました。山盛りとなった土砂を重機で排除する訓練も行われました。この重機を操縦されている方の腕がすばらしく、あっという間に土砂が取り除かれ、その道を救急車が通って私たち医療機関が展開する応急救護所をやってきます。

応急救護所は呉市内の病院、海上自衛隊呉衛生隊、呉市保健所などで編成され、トリアージエリア・赤エリア・黄色エリア・緑エリア・現場指揮所を展開し、被災者のトリアージ(選別)、トリートメント(治療)、トランスポート(搬送)を行います。

私たちは中国労災病院、呉共済病院と共同で現場指揮所を担当し、各エリアから報告されるトリアージタグで消防局と情報を共有し、救急車の空き状況、各医療機関への搬送状況、傷病者の搬送優先順位・搬送先、傷病者の人数把握等々を行いました。若干、搬送の段取りが遅くなった部分があり、医療機関サイドと消防局サイドとの連携が大事になってくると改めて感じたところです。



トリアージエリア



赤エリア

訓練終了後には、呉市長・危機管理監が私たち医療機関チームのところに来られ、お声をかけていただきました。

令和5年11月25日(土)～26日(日)は、中国地区DMAT連絡協議会実働訓練が行われ、木下循環器内科医師、増永副看護師長、濱田副看護師長、岡本薬剤師、私永田の5名で参加しました。この訓練は毎年中国5県が持ち回りで担当となり、担当県で大規模災害が発生したことを想定して行われます。担当県の県庁・災害拠点病院・DMATはもちろん、中国地方の他県のDMATチームも現地に参集し訓練を行います。今年の担当県は岡山県でした。

25日(土)朝、私たちはEMIS(広域災害救急医療情報システム)で指示された、参集拠点(山陽自動車道 道口PA)に向かいました。ここで、活動拠点本部を展開している倉敷中央病院に行くように指示されたため、倉敷中央病院へさらに移動。

倉敷中央病院では岡山県のDMAT隊が5～10チームほど参集し、活動拠点本部を展開しています。私たちのような他県のチームは、そこで次なる指示をもらいます。数分待機した後、重症者有りの情報が入った金光病院に日本鋼管福山病院のDMAT隊とともに派遣されることになりました。



道口PA



倉敷中央病院

金光病院に到着すると「待ってました!」とばかりに重症者が2名いるので、搬送して欲しいと依頼されました。活動拠点本部へ搬送と受入病院の選出を依頼しようとしたとき「訓練(大人)の都合でドクターヘリのフライトが決定しているので、遙照山グラウンドへ搬送すること。」と天の声が聞こえ、私が運転、日本鋼管福山病院の医師、濱田副看護師長が同乗し遙照山グラウンドへ搬送することになりました。遙照山グラウンドへの道のり(山道)は険しかったのですが何とか運転し到着。消防局・ドクターヘリと無事に合流し、患者は川崎医療福祉大学病院へ搬送されました。

この間、金光病院では木下循環器内科医師がリーダーとなり、病院の現状分析を行い、活動方針を定め、これからの病院運営をどうしていくかを病院スタッフと意見交換しながら進めていきました。電気は自家発電機で対応中、水は貯水タンクの残り1日分、食事は3日分有り、



金光病院

など限られた状況で必要なものを活動拠点本部へ依頼、EMISを活用して状況報告、重症者・透析患者の搬送依頼などフル回転で活動しました。訓練終了後にはインストラクターから、「訓練は当日のみだが、実災害では何日もこの状況が続く。必要な物資・人員の要請、患者避難になった際の搬送手段など先を見据えて活動しなければいけない。」と指導いただきました。まさにその通りだと実感いたしました。このような県を挙げての訓練に参加するのが私自身10年振りで、初めて参加するメンバーもいました。コロナ禍以降、大規模訓練に参加するのが久しぶりだったため、とても良い経験となりました。

26日(日)は各訓練会場の振り返りを報告する検証会が行われ、課題などが共有されました。来年度、この中国地区DMAT連絡協議会実働訓練は広島県が担当県になります。私たちも今年以上の活動をしなければいけないことが予想されるので、日頃から意識を高めてスキルアップに努めたいと思います。

風水害に備え負傷者救護合同訓練 中国5県のDMAT 500人参加

タデシ 地域話題 岡山市 シェアする ツイート

台風などの風水害に備え、中国地方5県の災害派遣医療チーム(DMAT)でつくる「中国地区DMAT連絡協議会」は25日、岡山県内の病院や消防訓練施設で合同訓練を行った。

2018年の西日本豪雨を念頭に、県南部に大型で強い台風が上陸し、土砂災害や浸水が発生、多くの負傷者が出た一との想定。DMAT60チーム約300人を含む計約500人が参加した。



合同訓練で人がトリアージを行うDMATのメンバーら

岡山市消防教育訓練センター(岡山市中区桑野)には土砂災害に巻き込まれ、横転したバスから約30人が運び込まれた設定で現場救護所を設置した。岡山、広島、山口の6チームが自衛隊や市消防局と連携して人が人に治療の優先順位を決めるトリアージや応急処置を実施。救急車などで各地の病院に搬送した。

県庁の調整本部で統括役を務めた斎藤博樹・岡山赤十字病院医療社会事業部長は「DMAT派遣要請のタイミングや浸水エリアの救急支援など、風水害特有の判断の難しさを再確認した。県民の命を守るため、今後に生かしたい」と話した。

DMATは専門的な訓練を受けた医師、看護師らで編成。中国5県では4月現在、60の災害拠点病院に1159人が登録している。

(2023年11月25日 16時59分 更新)

山陽新聞デジタル



集合写真

うちの部署の 接遇キラリさん



看護部
6A病棟
看護師
宇高 由莉さん

6A病棟は主に消化器疾患を抱えた患者さんが手術やがん薬物療法を行うために入院されています。患者さんが不安や思いを表しやすいため、笑顔で接することを心がけています。また、不安や悩みを一緒に解決できるよう寄り添う看護を大切にしています。常に笑顔を保ち、安心できる看護を提供できるよう日々努力していきたいです。

岩川 6A病棟看護師長より

宇高さんは、普段から患者さんだけでなく、周りのスタッフにも常に笑顔で真摯に対応している姿が印象的です。病棟には自身の思いを表出できない患者さんもおられます。宇高さんが大切にしている笑顔で患者さんに寄り添う看護の姿勢は、患者さんが思いを表出するきっかけにつながっています。



看護部
6B病棟
看護師
宮崎 悠斗さん

6B病棟では、内視鏡検査や治療をして数日で退院されていく患者さんから、重症の患者さん、長期入院が必要な患者さんまで様々な患者さんが入院されています。その中で、私は患者家族の気持ちに寄り添い、個々に合わせた看護を提供することを意識しています。これからも笑顔で患者さんたちと関わっていききたいと思います。

絆谷 6B病棟看護師長より

宮崎君は、3年目の看護師ですが、言葉遣いがとても丁寧です。ただ丁寧だけでなく、どんな状況でも落ち着いており、相手に安心感を与える言葉、態度で患者さんやご家族とかわかっています。そのため、患者さんからも信頼を得ています。また、彼の持つ柔らかい表情が職場の雰囲気をも穏やかにしてくれます。これからの成長がとても楽しみです。



薬剤部
薬剤師
香川保乃佳さん

薬剤部では主に、入院患者さんや外来患者さんへの薬の調剤や、抗がん剤・高カロリー輸液の調製、また手術前の患者さんへの中止薬の指導などを行っています。薬の用法用量だけでなく、検査値なども参考にしながら、患者さんが適切な治療を行えるよう日々努めています。これからも多職種の方々と連携しながら、より良い医療を患者さんへ届けられるよう精進していきたいです。

藤田 薬剤部長より

香川さんは、入社一年目の薬剤師です。仕事に対してまじめに取り組み、患者さんに対しても常に笑顔で、わかりやすく丁寧な対応をしています。そんな彼女の成長をとても楽しみにしています。



臨床検査科
臨床検査技師
尾仲 萌枝さん

入社して2年目になります。生理機能検査室は患者さんの協力がなければ正確な検査を行うことが出来ない部署です。なので、常に患者さんにリラックスして検査を受けて頂けるように、笑顔と寄り添う気持ちを大事にして検査に努めています。これからは、検査を待っている患者さんにもお声かけや行動をとれることを心がけて努めていきたいです。

福岡 臨床検査技師長より

尾仲さんは、生理機能検査室ではムードメーカー的な存在で、その笑顔で患者さんだけでなく一緒に働くスタッフも穏やかにしてくれています。2年目になり新しい検査を任せられる機会も増える中、どんなに忙しい時でも患者さんに優しくお声かけと丁寧な言葉遣いで対応しています。これからも精進されると思いますので、技師長として応援しています。

連携医療機関 紹介

かじまクリニック 副院長 梶間 理人



皆様、はじめまして。いつも大変お世話になっております。2023年4月より「かじまクリニック」にて副院長として勤務させていただいている梶間理人です。

私は高校までは広島市内で過ごし、高校卒業後は山口大学に進学。大学卒業後、広島大学病院で研修を行い、以降は小児科医として県内の様々な病院に勤めてきました。2020年4月からは呉市広にある中国労災病院に勤務しておりました。

「かじまクリニック」は呉市宮原2丁目、呉医療センターより徒歩1km程度のところにあります。当院は私の父が開業した内科クリニックで、地域に根差した診療を行っています。しかしここ数年は父の体力的な問題から午前みの診療となっており、また体調不良で急遽代診したりなどで受診される皆様にご迷惑をおかけしておりました。この度、私自身も呉市の地域医療に貢献したいという思いから、

父と二人で診療させていただくこととなりました。

現在は、内科・小児科クリニックとして午前、午後と診療を行っております。従来行っていた内科診療やCT画像検査も午前、午後両方とも可能です。併せて成人の発熱外来やコロナウィルスの迅速検査も開始しております。さらに、小児科専門医による小児の診療も開始いたしました。急な発熱、咳嗽、嘔吐・下痢などの急性症状や各種迅速検査などにも対応しております。予防接種や乳児検診、アトピー性皮膚炎や喘息などのアレルギーの診療なども行っておりますのでいつでもご相談ください。

医療センターの先生方には内科、小児科のみならず、急変時の対応なども受けていただき非常に感謝しております。これからも病診連携を密にし、呉市の医療に貢献していきたいと思っております。

もともと呉市には祖母や親戚が住んでおり、幼少期より遊びに来たり、お祭りに参加したり、非常に思い入れのある地です。今後も呉市民の皆様と寄り添っていきけるよう努力いたします。どうぞよろしくお願いいたします。



かじまクリニック

〒737-0024 広島県呉市宮原2-6-6
TEL: 0823-69-0090 FAX: 0823-69-0090

我が家の「スターたち」



保護者コメント

入園当初は、歩くことも十分にできない状態でしたが、今では、友達と一緒に走り回るようになりました。

家では、毎日の出来事や友達の名前を教えてください。出来ることや、おしゃべりが増え、「そんなことできるの!？」と驚かされることもたくさんあり、成長が嬉しいばかりです。また、人に「大丈夫?」と声をかけたり心成長も感じます。

恥ずかしがり屋な反面、変顔をしたり、人を笑わせることが好きな奏ちゃん。

これからも、友達と遊んだり、いろんな刺激を受けながら、奏ちゃんらしく、のびのび過ごしてね。

富中奏吾くん



担任保育士のコメント

お散歩が大好きで、公園に到着するとすべり台にまっしぐらのそうごくん。

「まてまて～」と追いかけてお話をしたり、協力してブロックを積み上げたり、お友だちとのやりとりもとっても楽しそうです。

「清掃車だ! クレーン車だ!」と大好きな乗り物の名前もたくさん覚えて、うれしそうに教えてください。オムツがはずれたり、お話が上手になったり、ぐんぐん成長するそうごくん。

すずらん園での楽しい思い出、いっぱい作っていきましょうね!



沖元せりかちゃん かれんちゃん

保護者コメント

おねえちゃんが1才の時から保育園でお世話になっています。おねえちゃんはお人見知りかひどすぎて慣れるまでにとっても時間がかかりましたが、今では園で一番のお姉さん! 習ったお歌も踊りも遊びも家で元気に披露してくれます。

特に先生の真似が大好きで、運動会の練習をしていた頃は「〇〇ちゃん、〇〇ちゃん、よい、ピー!」と笛まで吹いて先生になりきっていました。

2つ下の妹は10ヶ月で預けましたが、みんなにニコニコ。毎日登園するたびに先に来ているお友達みんながすぐ寄って溺愛してくれるので見ていておもしろい、みんなのアイドルになっていて嬉しいです! 周りのお友達や先生のおかげで2人ともたくさん成長させてもらっています☆



担任保育士のコメント

笑顔がとってもかわいいかれんちゃん。目が合うとニコッとしてくれ、毎日癒されています。

入園当時はずりばいだったかれんちゃんも今では歩けるようになりましたね! 出来る事がどんどん増え、成長を近くで見ることができてとっても嬉しいです。

せりかちゃんは妹のかれんちゃんが好きで、保育園でも愛が溢れて抱きついたり歩く練習で手を持ってあげる優しいお姉さんです。

人見知りだったせりかちゃんも今では友達と走り回ったり、「これ一緒にしよ!」と自分から誘ったりするぐらい活発です。

最近は友達と手をつないでトイレに行くのがブームで、そんな姿にほっこりさせてもらっています。

これからももっともっと楽しいことをたくさんして思い出を作ろうね。

呉医療センターへご寄付をいただきました。

令和5年10月～12月に、ご寄付をいただきました。◆ご寄付 匿名1名(医療機関支援)
気持ちのこもったご支援をありがとうございました。

編集後記

年末年始の雰囲気は好きですか? 子どもの頃は、全てが特別でワクワクしながら過ごしていましたが、歳を重ねるに連れ、ワクワク感は減っていき、今では年越しの瞬間すら布団の中です。新年を迎えるということは、数え年で言えば、また一つ年をとったということですが、どうであれ1年生きてこれたとも言えます。

皆様にとって、2024年が幸多き一年となりますことを心よりお祈り申し上げます。

(広報委員会 委員)